

雑誌『平戸之光』の総目次と鄭成功関係記事の解題

若 松 大 祐

はじめに

一、雑誌『平戸之光』の重要性

二、雑誌『平戸之光』の総目次

三、鄭成功関係記事の解題

付録

はじめに

本稿は雑誌『平戸之光』全49号の目次すべてを紹介し、特に鄭成功に関する記事について解題を付す試みである。こうした試みにより、20世紀前半の平戸に学問的な蓄積のあることが、そして鄭成功認識のあることが、それぞれ改めて明らかになる。本稿は『常葉国文』に収録され、冊子媒体でのみならず、常葉大学・常葉大学短期大学部リポジトリにおいて電子媒体でも刊行される。筆者は、多くの人々がインターネットを通じて『平戸之光』の存在を知り、大いに『平戸之光』を利用するようになるのを願う次第である。

一、雑誌『平戸之光』の重要性

ここでは3つの観点から雑誌『平戸之光』を大きく眺め、『平戸之光』の持つ重要性を指摘しよう。ただし、宮徹男（後述）が『平戸之光』についてすでに解題を書いており、この解題はまさに簡にして要を得るものである。そこで本稿の付録に宮徹男による解題を転載した。本稿は、できる限り屋上屋を架すことのないように心がけ、『平戸之光』の重要性を指摘したい。

第一に、雑誌『平戸之光』はいつ誰がどこで発行したのか。原版と復刻版がある。原版は、創刊号が1931（昭和6）年10月に発行され、基本的に隔月で発行が続き、そして第45号が1941（昭和16）年4月に発行された。途中、臨時増刊号が3回、特別号が1回発行され、合計49回発行された。第45号に終了宣言が

ないから、発行者はなお継続して発行するつもりであったのに、何らかの理由で発行が停止になったのかもしれない。

原版の発行者は、塙薫蔵である。塙薫蔵（1869-1946）は平戸出身で、鯉南と号した。宮徹男の解題によると、塙は詩人、警察官、新聞記者、教師、平戸村長などを歴任した。平戸村長を退任後に長崎日日新聞社に勤めるも辞職して、雑誌『平戸之光』を主宰した。塙には、『浦敬一伝』などの平戸の歴史や文化に関する著作が多数ある。塙の経歴や交友関係を理解できる記事が『平戸之光』にいくつか載る¹。

『平戸之光』の発行所は、愛宕山荘（平戸町大字平戸 586）である。発行人（兼編集人）の塙薫蔵の住所が「平戸町大字平戸 586」であるから、愛宕山荘は塙薫蔵の自宅なのであろう。愛宕山荘の場所は、現在の地名で言えば、赤坂であるようだ。また、印刷は佐世保市内のいくつか印刷業者が担当しており、『平戸之光』全 49 号が同一の印刷所で印刷されたわけではない。

復刻版は 1996（平成 8）年に 180 部限定で発行された。（ちなみに筆者の手元にあるのは限定復刻版 72 番である。）原版全 49 号を 5 巻に合本したものとなっている。復刻版全 5 巻はすべて 1996 年に発行されたものの、第 1 巻と第 2 巻と第 4 巻が同年 11 月、第 3 巻と第 5 巻が同年 10 月というふうに、発行時期に少しずれがある。復刻版は原版をそのまま影印したものであるから、恐らく唯一の違いは復刻版に「解題」（宮徹男）が付いていることであろう。

復刻版の発行者が、宮徹男である。宮徹男（1944- ）は小倉市（現在の北九州市）の出身で、1972 年より福岡市の九州大学教養部裏に葦書房を開設し、古書を販売する。（なお、宮徹男の葦書房は、同じ福岡市内にある図書出版葦書房と全く関係がない。）宮徹男は 1977 年に店舗を中央区草香江へ移転し、同じ年には反町茂雄の主催する「文庫の会」に入会して、古書を取り扱うスキルを磨く。葦書房は、『九州の郷土誌を中心とした 西日本文献目録』（全 61 号）や『九州を中心とした 西日本考古学文献目録』（全 18 号）を刊行した。2014 年末で葦書房の店舗を閉じ、以降は規模を縮小して福岡市早良区次郎丸でインターネット通販のみを行っている（<http://www.e-furuhon.com/~ashishobo/>）。宮徹男の葦書房は基本的には古書専門店であるものの、雑誌『平戸之光』を限定復刻したように、時に出版も行った²。

第二に、雑誌『平戸之光』の発行の目的は何か。宮徹男の解題が指摘するように、『平戸之光』創刊号の巻頭の「発行の趣旨」において主宰者の塙薫蔵が、郷土の史実の解明、先達の顕彰、青年諸氏の啓蒙などを発行の目的に挙げる。『平戸之光』

創刊号に載る祝詞では、世界情勢の変動に伴ってかつて栄えた都府が寒村僻地になることもあり、現在（1931年）の平戸がまさにそのようである、と山川端夫が指摘する。同じく祝詞で、現在の平戸が「興隆の機運振るはざるかに見える」、と牧山耕蔵が述べる。いわば、平戸の関係者たちは当時の平戸の寂れていく様子を危惧していた。だからこそ、塙薫蔵は雑誌を主宰して「郷土の光華」に改めて目を向け、平戸を盛り上げようと試みたのだろう。

第三に、雑誌『平戸之光』はどのような内容の記事を載せるのか。宮徹男の解題が指摘するように、主な内容は、陽明学の推奨であり、郷土史の紹介であり、平戸関係者の顕彰であり、読者からの投稿（詩歌）であり、雑録であり、関係者の近況報告である。さらに、付録として史料を翻字して載せる。しかも、多くの記事には著者名が明記されていない場合が多く、こうした記事は塙薫蔵による執筆なのだという。

日本において学術研究は、明治20（西暦1887）年ごろまでは和本で発表されてきた。明治20年ごろを境にして、洋装本が発表の舞台になっていく³。昨今、よほどの専門家でない限り、日本の歴史を研究する際に、人々は特定テーマの洋装本を近代的で実証的な研究業績（先行研究）に位置付け、ほとんど和本を先行研究として位置づけ参照することがないようだ。しかし、和本に書かれている情報は重要である場合もあり、無視すべきではない。『平戸之光』（1931-1941年）の50年前は、明治20（西暦1887）年ごろである。『平戸之光』の記事の多くは、和本に基づいて執筆されている。そのため、我々は『平戸之光』の記事を通じ、和本で展開された先行研究に接近できるのである。そこで、『平戸之光』は平戸の歴史を研究するための（準）基礎資料になるだろう。こうした『平戸之光』の重要性については、本稿第三節で鄭成功認識を事例にして再び説明したい。

二、雑誌『平戸之光』の総目次

ここでは『平戸之光』全49号の総目次を掲載しよう。本稿はすべての目次を掲載する際、以下の三つの方針を採る。第一は、復刻版第1巻の冒頭に掲載されたすべての目次を転載する。第二は、第一の方針に基づき、標語や広告を目次に含めない。多くの号の表紙の裏には「素行先生の言葉」が連載されるものの、原版ではこのページにページ番号がついていない。第三に、第一の方針に基づき、「文藻」や「消息」というカテゴリーだけを記しておき、詳細を記さない。こうした方針を採った結果、時に一つの記事に対して、記事の実際のタイトル、原版の表

紙に記載のタイトル、復刻版の冒頭の総目次に記載のタイトルが、それぞれずれることもある。

すべての目次を眺めてみると判明するのはやはり、平戸の歴史や文化を大々的に宣伝するという、『平戸之光』の性格である。十城別王、松浦家、切支丹（キリシタン）、菅沼貞風、浦敬一といった基礎的な人物や事項を紹介し、また歴史のこぼれ話や、すごい人物（例えば力士の鯨左衛門など）を載せる。しかしながら、2020年代の現在からみれば、やはり堅い内容が多い。タイトルを見た限り、飲食や景色や娯楽に関する内容の記事がほとんど見当たらない。1930年代当時であれば、カスドース、カステラ、松浦漬は知られていたはずである。平戸八景を積極的に紹介することもない。庶民の風俗習慣を紹介するような記事もない。

なお、開始頁は、原版は号ごとに1から振り当てられた。ただし、「資料」については、独自の頁番号が数号にわたって連動して振り当てられている。また、復刻版は全5巻に連動して振り当てられた。

『平戸之光』総目次

平戸之光 第一巻（1996（平成8）年11月発行）

第一号

1931（昭和6）年10月発行

題目	著者	原版開始頁	復刻版開始頁
発行の趣旨		1	3
『平戸之光』発行を祝す	福田雅太郎	5	7
『平戸之光』発行を祝す	山川端夫	5	7
『平戸之光』発行を祝す	牧山耕蔵	6	8
『平戸之光』発行を祝す	岩井敬太郎	7	9
雑誌発行を祝す	森肇	9	11
山鹿素行の生涯と学徳（一）		13	15
松浦党と元寇（一）		18	20
吉田松陰の平戸遊学（一）		22	24
平戸と切支丹宗（一）		25	27
秋田に於ける平戸隊の戦死者	岡次郎	29	31
故浦敬一氏を憶ふ		35	37
守山正彝氏の年譜（一）		38	40
牧山忠平翁の年譜略		40	42
文藻		43	45
故沖楨介氏に関する新消息		47	49

山鹿素行子の墓に詣づ		48	50
元寇記念祭		49	51
消息		52	54

第二号

1931（昭和6）年11月発行

山鹿素行の生涯と学徳（二）		1	73
松浦党と元寇（二）		7	79
吉田松陰の平戸遊学（二）		12	84
平戸と切支丹宗（二完）		17	89
十城別王（一）	山口昔雄	20	92
十城別王別伝	岡次郎	23	95
菅沼君瘞髮碑	岡次郎	25	97
壮年有志者に勧告す	菅沼貞風	26	98
平戸港商業の歴史		28	100
守山正彝氏の年譜（二完）		32	104
文藻		35	107
藤樹神社に詣づ	塙薫蔵	40	112
山鹿秀遠の忠節		42	114
三浦按針の墓乎		44	116
消息		48	120

第三号

1932（昭和7）年1月発行

山鹿素行の生涯と学徳（三完）		1	129
松浦党と元寇（三完）		8	136
平戸は三浦安針墳墓の地		14	142
十城別王（二）	山口昔雄	22	150
三浦安針自叙伝		27	155
文藻		38	166
小泉八雲と平戸	羽田生	43	171
平戸漢学会		48	176
消息		49	177
資料 三光譜録（一）		1	179

97 雑誌『平戸之光』の総目次と鄭成功関係記事の解題

第四号

1932（昭和7）年2月発行

陽明先生の学術に就て（一）		2	198
吉田松陰の平戸遊学（三）		12	208
烈士沖楨介氏一行北京出発の光景		15	211
十城別王（三完）	山口昔雄	20	216
沖君楨介伝	岡次郎	26	222
弓道の達人古弓翁		28	224
文藻		31	227
与嶋鯉南書	岡次郎	36	232
追遠録（一）兼山井上寅之介先生		37	233
妖怪奇談（一）		38	234
消息		40	236
資料 三光譜録（二）		5	239

第五号

1932（昭和7）年9月発行

陽明先生の学術に就て（二）		1	249
吉田松陰の平戸遊学（四）		8	256
司馬江漢の平戸に於ける足跡（一）	峰泰	12	260
運命の開拓者草刈太一左衛門翁		20	268
文藻		23	271
追遠録（二）坂勘助翁		27	275
霊峰志々伎山に登る		30	278
妖怪奇談（二）		33	281
消息		35	283
資料 三光譜録（三）		12	287

第六号

1932（昭和7）年10月発行

陽明先生の学術に就て（三）		1	297
吉田松陰の平戸遊学（五完）		5	301
司馬江漢の平戸に於ける足跡（二）	峰泰	9	305
道力無双日多窟伽山禪師		18	314
文藻		23	319
英人の観た龍手田安定氏	羽田生	27	323

平戸に於ける心学奨励の施設		30	326
妖怪奇談（三）		33	329
消息		35	331
資料 三光譜録（四）		17	335

第七号

1933（昭和8）年1月発行

陽明先生の学術に就て（四）		2	348
葉山鎧軒翁と大坂騒動（一）		7	353
司馬江漢の平戸に於ける足跡（三完）	峰泰	11	357
忠烈無双佐川主馬助氏		20	366
長村靖斎先生略譜		24	370
文藻		26	372
追遠録（三）安藤藤次翁	塙薫蔵	31	377
浦敬一氏赤松光映師と語る	今田主税（談）	35	381
消息		37	383
資料 三光譜録（五）		25	387

第八号 生月人文発達史

1933（昭和8）年3月発行

陽明先生の学術に就て（五）		1	405
生月人文発達史		5	409
ルイ・アルメーダの生月伝道	近藤英吉	30	434
生月四郎の名刀の話		34	438
関西富豪益富家略譜		34	439
快力絶倫生月鯨太左衛門		39	443
文藻		41	445
水産界の功労者		43	447
消息		44	448
資料 三光譜録（六）		33	449

平戸之光 第二巻（1996（平成8）年11月発行）

第九号

1933（昭和8）年5月発行

陽明先生の学術に就て（六完）		1	465
葉山鎧軒翁と大坂騒動（二完）		5	469

95 雑誌『平戸之光』の総目次と鄭成功関係記事の解題

直谷城趾史考	深見牧太郎	9	473
唐通事山田蘇作翁の事蹟	藤田友彦	11	475
蘭医泰斗嵐山甫庵翁		16	480
長村靖斎先生事功の一		18	482
東亜問題先覚志士		20	484
松井小右衛門君小伝		21	485
文藻		23	487
追遠録（四）松浦縮蔵翁	塙薫蔵	28	492
孔子釈菜に参列するの記	塙薫蔵	30	494
消息		33	497
資料 三光譜録（七）		41	499

第一〇号 菅沼貞風君追悼記念

1933（昭和8）年7月発行

菅沼貞風君略年譜		1	517
憶菅沼貞風君—菅沼貞風のプロフィール—		3	519
余の観たる菅沼貞風	山口昔雄	10	526
菅沼貞風君追悼詩歌		13	529
桃水遺稿	菅沼貞風	17	533
鞠躬記事	菅沼貞風	21	537
平戸窮民救済策	菅沼貞風、峰貞五郎	31	547
送古川君の島原序		35	551
書簡—寄斉藤坦蔵書一	菅沼貞風	36	552

臨時増刊号 遠征志士追悼録

1933（昭和8）年8月発行

追悼会記事		1	571
遠征志士小伝		11	581
所感を述べ開会の辞に代ふ	岩井敬太郎	25	595
哲人浦敬一君	塙薫蔵	29	599
稲垣満次郎氏を憶ふ	藤谷義彦	33	603
菅沼貞風図南の夢	山口昔雄	38	608
平戸人の暹羅遠征	荒川雅五郎	43	613
豪胆機智に富める松井小右衛門君	倉田黄一	51	621
ブラジルに於ける山県勇三郎翁の事業を憶ふ	松瀬重任	58	628
故人書簡二篇	志佐要一郎・浦敬一	63	633

第一一号 大久保馬場決闘実録

1933（昭和8）年10月発行

陽明学談叢（一）		1	643
大久保馬場の決闘実録	峰泰	5	647
大島筑前守胤政の誠忠美談		21	663
文藻		25	667
追遠録（五）佐々澄治翁		27	669
郷土認識の一展開	堀修三	32	674
伊勢神宮参拝奨励案	中倉専一郎	35	677
資料 三光譜録（八）		53	679

第一二号 素行子の学統及感化

1934（昭和9）年1月発行

陽明学談叢（二）		2	694
素行子の学統及感化		6	698
各藩士風見込書		12	704
越後流兵学者真見塚融觀翁		17	709
孔雀の筆者徐碑晋		20	712
文藻		22	714
追遠録（六）林鈺藏翁	塙薫蔵	24	716
林鈺藏先生追悼の辞	荒川雅五郎	27	719
牛買ひの詩		31	723
故千浦友七郎翁を悼む		32	724
貸上金相撲取組		34	726
資料 三光譜録（九）		63	727

第一三号 坂本天山と其伝統

1934（昭和9）年3月発行

陽明学談叢（三）		1	745
坂本天山と其伝統		4	748
平戸とポルトガル	土肥精一郎	12	756
怪傑龍谷和尚		18	762
玉置讓斎先生		20	764
文藻		23	767
長村靖斎先生詩集（一）		25	769
追遠録（七）釣叟和尚	塙薫蔵	26	770

93 雑誌『平戸之光』の総目次と鄭成功関係記事の解題

戦塵を顧みて（一）	KO 生	29	773
資料 三光譜録（十）		73	779

第一四号 建武中興と松浦定公

1934（昭和9）年5月発行

陽明学談叢（四）		1	793
建武中興と松浦定公		5	797
龍溪山光明寺の縁起		17	809
国学の泰斗浅山純尹翁		22	814
長村靖斎先生詩集（二）		24	816
文藻		25	817
功烈美談（一）工兵伍長大橋三之丞君		27	819
戦塵を顧みて（二）	KO 生	30	822
資料 三光譜録（十一完）		83	827

第一五号

1934（昭和9）年7月発行

陽明学談叢（五）		1	843
菅沼の家の事	菅沼貞風	4	846
中村弥八郎翁		14	856
文藻		18	860
追遠録（八）噫井上万平君	埴薫蔵	21	863
始て洋服を着たりし事	菅沼貞風	24	866
戦塵を顧みて（三）	KO 生	25	867
長村靖斎先生詩集（三）		30	872
資料 西海鯨鯢記		1	873

第一六号 素行先生祭典記念号

1934（昭和9）年10月発行

祭山鹿素行先生文	埴薫蔵	1	893
素行子二百五十年回忌を迎へて	山鹿誠之助	3	895
平戸藩養維新館の沿革と教育の効果		11	903
素行先生追悼詩歌		16	908
素行先生二百五十年遠忌法要		18	910
戦塵を顧みて（四）	KO 生	18	910
長村靖斎先生詩集（四）		24	916

平戸に於ける素行先生の遺教	塙薫蔵	25	917
---------------	-----	----	-----

第一七号 大亜細亜主義の先覚浦敬一

1934（昭和9）年12月発行

大亜細亜主義の先覚浦敬一	鹿子木員信	1	943
立志伝中の人針浦退蔵翁		16	958
譲斎先生追悼茶話会		21	963
文藻		22	964
戦塵を顧みて（五）	KO 生	26	968
旧家訪問記（一）古川治部左衛門の事蹟	鎮西野人	29	971
平戸藩馬廻以上分限帳（嘉永年間）		1	975

平戸之光 第三卷（1996（平成8）年10月発行）

第一八号 松浦家御系図

1935（昭和10）年2月発行

陽明学談叢（六）		1	997
松浦党の盤桓考（一）		4	1000
木ヶ津普門寺の縁起		9	1005
日本精神鼓吹者籠手田安定翁		14	1010
文藻		20	1016
長村靖斎先生詩集（五）		23	1019
追遠録（九）南部重遠翁を懷ふ	塙薫蔵	24	1020
旧家訪問記（二）由緒深き馬淵家の系統	鎮西野人	28	1024
戦塵を顧みて（六）	KO 生	30	1026
松浦家御系図		1	1031

第一九号

1935（昭和10）年4月発行

陽明学談叢（七）		1	1045
松浦党の盤桓考（二）		4	1048
大智庵城没落の哀史		11	1055
社稷の功臣熊沢大膳翁		15	1059
法典編纂の權威者深江遠広先生		18	1062
文藻		20	1064
長村靖先生詩集（六）		23	1067

91 雑誌『平戸之光』の総目次と鄭成功関係記事の解題

旧家訪問記（三完）安倍宗任の後裔山本家	鎮西野人	24	1068
戦塵を顧みて（七完）	KO 生	25	1069
功烈美談（二完）陸軍一等看護長古川平一郎君		29	1073
故大曲通介翁の談		31	1075
桐野利秋談		1	1077

第二〇号 大島郷土史

1935（昭和 10）年 11 月発行

大島郷土史		1	1095
文藻		46	1140
宝暦神社鎮座の由緒		48	1142
妖怪奇談（四完）飛び剣の話		51	1145
満州漫録	RH 生	52	1146
長村靖斎先生詩集（七）		55	1149

第二一号

1936（昭和 11）年 1 月発行

陽明学談叢（八）		1	1159
松浦党の盤桓考（三）		5	1163
按針塚の記（一）	菅沼貞風	8	1166
長村靖斎先生詩集（八）		15	1173
円明流の達人成田浄貫翁		16	1174
歌壇の巨人神戸大汀翁		17	1175
追遠録（十）熊沢精翁	塙薫蔵	19	1177
平戸に於ける伊藤公の足跡		21	1179
浦敬一の遺子と称する祖父江実は何人？	塙薫蔵	22	1180
文藻		28	1186
資料 大曲覚書（一）		1	1189

第二二号

1936（昭和 11）年 4 月発行

松浦党の盤桓考（四完）		1	1207
按針塚の記（二）	菅沼貞風	8	1214
平戸に於ける西教弘通史（一）	近藤英吉	13	1219

国夫人田川氏		20	1226
噫中倉万次郎翁	塙薫藏	26	1232
日本最初の茶園		29	1235
頌徳記念館の建築計画		31	1237
文藻		34	1240
資料 大曲党書(二)		9	1243

第二三号

1936（昭和 11）年 5 月発行

陽明学談叢（九）		1	1257
亀岡神社の宝物明治天皇の御産衣		6	1262
按針塚の記（三完）	菅沼貞風	9	1265
平戸に於ける西教弘通史（二）	近藤英吉	15	1271
原道流槍術の達人田原牧陽先生		20	1276
木瀬志津摩伝	菅沼貞風	23	1279
平戸素行会成る		24	1280
西郷南洲翁安藤藤二翁を訪ふ		27	1283
吉田松陰先生遺跡の標識		29	1285
平戸左文字の話		31	1287
長村靖斎先生詩集（九）		32	1288
文藻		33	1289
樺太遊詩（一）	山下止義	34	1290
資料 大曲覚書（三）		17	1291

特別号 鄭將軍忠節録

1936（昭和 11）年 9 月発行

鄭將軍忠節録—延平郡王鄭成功—		1	1307
文藻		28	1334
県社開山神社の創設		30	1336
鄭氏の記念遺物		35	1341
資料 鄭氏遺蹟碑御達に付書取草稿		39	1345
資料 鄭氏遺蹟碑祭式等御達向草稿		41	1347
資料 田川七左衛門の訴状		43	1349

89 雑誌『平戸之光』の総目次と鄭成功関係記事の解題

第二四号

1936（昭和 11）年 10 月発行

陽明学談叢（十完）		1	1357
山鹿素行先生家譜		5	1361
平戸に於ける西教弘通史（三）	近藤英吉	11	1367
長村靖斎先生詩集（十完）		16	1372
贈従三位源答公略伝	松浦伯爵家文庫楽歳堂編輯	17	1373
時習館長秋永桂蔵翁		18	1374
追遠録（十一完）山田貞一君		21	1377
素行先生書斎其まゝを偲ぶ		23	1379
広瀬氏『治平要録』を山鹿家へ還付す		27	1383
文藻		29	1385
樺太遊詩（二）	山下止義	32	1388
資料 大曲覚書（四完）		25	1389

第二五号

1937（昭和 12）年 1 月発行

平戸神楽に就て	菅沼周次郎	1	1405
素行先生の遺著と遺物		10	1414
平戸に於ける西教弘通史（四）	近藤英吉	22	1426
樺太遊詩（三）	山下止義	26	1430
国学の先覚橘美津与志翁		27	1431
東亜問題と平戸の先覚		31	1435
大橋訥庵と平戸の門人		34	1438
志士沖楨介君の銅像成る		37	1441
沙漠の夜の夢を求めて	永福茂三郎	39	1443
文藻		47	1451
天保年代資産家取組		49	1453

第二六号

1937（昭和 12）年 5 月発行

山鹿素行先生と吉田松陰先生	広瀬豊	1	1463
平戸に於ける西教弘通史（五）	近藤英吉	20	1482
遠征の急先鋒志佐要一郎氏		26	1488
樺太遊詩（四完）	山下止義	29	1491

心学かぞへうた		30	1492
松本三九郎翁頌徳記念碑除幕式		31	1493
文藻		32	1494
山鹿家所蔵文書目録	広瀬豊	35	1497

平戸之光 第四卷（1996（平成8）年11月発行）

臨時増刊号 安藤潭影翁蹇々録

1937（昭和12）年7月発行

安藤潭影翁蹇々録 家系		1	1515
安藤潭影翁蹇々録 年譜		3	1517
安藤潭影翁蹇々録 遺稿		21	1535
安藤潭影翁蹇々録 詞藻		48	1562

第二七号

1937（昭和12）年9月発行

正眼国師盤珪大和尚		1	1567
平戸に於ける西教弘通史（六）	近藤英吉	11	1577
対暹事業の先覚者石橋禹三郎君		16	1582
石橋禹三郎氏の追悼座談会		19	1585
平戸素行会総会記事		20	1586
猶興館記念事業経過及現状		22	1588
文藻		24	1590
資料 岩倉公献替録		1	1593

臨時増刊号 稲垣満次郎審謬録

1937（昭和12）年11月発行

憶稲垣満治郎君	埴薫蔵	1	1617
稲垣満次郎審謬録		5	1621
寄本沢叔父書翰		34	1650

第二八号

1938（昭和13）年1月発行

中朝事実に就て		1	1679
黙霖上人平戸駐錫		8	1686
平戸に於ける西教弘通史（七）	近藤英吉	11	1689

87 雑誌『平戸之光』の総目次と鄭成功関係記事の解題

針尾島の学者楠本碩水先生	岡次郎	16	1694
橘美津与志翁の後裔に就て		26	1704
九州方面軍事史資料探訪記	有馬成甫	28	1706
平戸行	河野通毅	31	1709
素行精神研究会		38	1716
稲垣満治郎氏追悼法会		39	1717
文藻		40	1718

第二九号

1938（昭和13）年3月発行

亜細亜快復論と「すめらあじあ」（一）		1	1729
今福松浦家変遷要略（一）		11	1739
平戸に於ける西教弘通史（八）	近藤英吉	15	1743
浦・菅沼両傑士半百年記念		21	1749
山鹿流兵学者奥村崎雲先生		23	1751
憶海軍中將松山茂君		25	1753
桜谿書院の懷古		28	1756
『大日本商業史』出版の行程		31	1759
文藻		32	1760
資料 けいまん国鬼退治一百合若大臣一代記一（一）		1	1763

第三〇号

1938（昭和13）年6月発行

亜細亜快復論と「すめらあじあ」（二完）		1	1779
今福松浦家変遷要略（二）		13	1791
平戸に於ける西教弘通史（九）	近藤英吉	17	1795
征西將軍の宮の偉略	菅沼貞風	22	1800
贈従三位源定公略伝	松浦伯爵家文庫楽歳堂編輯	26	1804
若林強斎先生講演底稿	岡次郎	29	1806
佐々皿山窯業の遺跡		31	1809
平戸に因める名家系譜		33	1811
文藻		34	1812
資料 けいまん国鬼退治一百合若大臣一代記一（二）		11	1815

第三一号

1938（昭和 13）年 9 月発行

祭浦敬一・菅沼貞風両君文	先賢事蹟顕彰会	1	1829
輓歌詩		5	1833
浦敬一・菅沼貞風両先覚の心事心蹟		7	1835
漢口楽善堂時代の追憶談		14	1842
浦敬一・菅沼貞風両先覚五十年祭記事		20	1848
今福松浦家変遷要略（三）		22	1850
室町時代松浦党割拠の状況		26	1854
先賢事蹟顕彰会の成立		28	1856
文藻		29	1857
資料 けいまん国鬼退治一百合若大臣一代記一（三）		19	1859

第三二号

1938（昭和 13）年 11 月発行

祝聖戦之大捷		1	1879
素行学の精神と平戸魂		2	1880
今福松浦家変遷要略（四）		11	1889
有為学会時代の懐旧（一）		14	1892
中巻の達人高野久馬之允翁		18	1896
憶久家竹一郎翁之風格	塙薫蔵	20	1898
沖図書館長沖莊蔵翁		21	1899
柳本海軍大佐の消息		22	1900
嗚呼懿哉中倉万次郎翁		23	1901
戦歿勇士の功烈を偲ぶ		24	1902
南支の花と散る日高軍曹		27	1905
荒川兄弟の奮戦負傷	塙薫蔵	29	1907
文藻		31	1909
資料 けいまん国鬼退治一百合若大臣一代記一（四）		33	1911

第三三号

1939（昭和 14）年 4 月発行

今福松浦家変遷要略（五）		2	1936
有為学会時代の懐旧（二）		5	1939
日支事変に際し偉人を憶ふ		8	1942

85 雑誌『平戸之光』の総目次と鄭成功関係記事の解題

『天誅組の主将中山忠光』を読む		14	1948
『黄庵詩文』を読み感を記す	塙薫蔵	17	1951
七十古稀の賀筵	塙薫蔵	20	1954
文藻		22	1956
資料 けいまん国鬼退治―百合若大臣一代記―(五完)		45	1959

平戸之光 第五卷 (1996 (平成 8) 年 10 月発行)

第三四号

1939 (昭和 14) 年 6 月発行

『昭和国民読本』を読み感あり		1	1983
今福松浦家変遷要略 (六)		4	1986
有為学会時代の懐旧 (三完)		7	1989
松陰先生平戸遊学		11	1993
中学猶興館の創設並に沿革		21	2003
文藻		32	2014
総裁閣下を迎へて平戸素行会通常総会		33	2015
猶興館扁額拝戴式		35	2017
吉田松陰先生平戸遊学九十年記念講演会		36	2018
本誌後援会成る		36	2018
塙薫蔵先生古稀の寿を迎ふるに際し同志諸彦に檄して賛同を乞ふ		39	2021

第三五号

1939 (昭和 14) 年 8 月発行

万民輔翼		1	2027
今福松浦家変遷要略 (七完)		15	2041
平戸に於ける西教弘通史 (十)	近藤英吉	19	2045
素行先生『本朝古今戦略考』		24	2050
千島開拓の先駆者中村克次郎翁		26	2052
憶風外江山和尚		30	2056
掃苔稽顙録 (一) 浅野鶯庵先生之墓		32	2058
故中村克次郎翁追悼法要		34	2060
読者の声		35	2061
文藻		39	2065

第三六号

1939（昭和 14）年 10 月発行

天壤無窮、皇運扶翼（一）		1	2071
雄々敷素行先生の態度		8	2078
星鹿半島の刈萱城址		12	2082
平戸に於ける西教弘通史（十一）	近藤英吉	15	2085
漢水の浜浦氏を憶ふ	今井精一	21	2091
徳村氏拉致事件顛末	永福茂三郎	21	2091
憶岩永笠嶺君		25	2095
掃苔稽顙録（二）正四位式部少輔外山了円翁墓		27	2097
素行先生忌祭		30	2100
寄贈書籍雑誌妄言		31	2101
清明き心の道	洛外穩士	37	2107
文藻		40	2110

第三七号

1939（昭和 14）年 12 月発行

天壤無窮、皇運扶翼（二）		1	2117
幕府、聖教要録出版を阻止		10	2126
平戸に於ける西教弘通史（十二）	近藤英吉	13	2129
中村弥八郎翁の訓言		16	2132
山鹿兵学継承者本沢幽然先生		17	2133
掃苔稽顙録（三）沖垣徳字伯成之墓		19	2135
平戸に於ける奥村五百子の足跡		22	2138
平戸護国神社		24	2140
平戸町々葬第五回		28	2144
消息		28	2144
文藻		32	2148
資料 有馬軍記		35	2151

第三八号 皇紀二千六百年紀元節

1940（昭和 15）年 2 月発行

皇紀二千六百年		1	2161
家系を繙ねて（一）	蒲生治郷	4	2164
旧平戸藩教育史（一）		16	2176

83 雑誌『平戸之光』の総目次と鄭成功関係記事の解題

訪秋田古戦場記	岡彪邨	21	2181
最も簡単なるもの最も美し	豊田鳴子	22	2182
未知の世界	鮎川静	24	2184
素行文庫建設計画		27	2187
消息		29	2189
文藻		33	2193
恩遇枯骨に及ぶ一在東京旧平戸藩臣墓地 改葬一		37	2197

第三九号

1940（昭和15）年5月発行

天壤無窮、皇運扶翼（三完）		1	2209
旧平戸藩教育史（二）		8	2216
平戸に於ける海部昂藏翁の余韻		16	2224
掃苔稽顙録（四完）後藤衛門之墓		19	2227
多々良庸信氏颯爽として語る		20	2228
素行文庫建築地鎮祭一於山鹿家積徳堂址 一		23	2231
消息		25	2233
文藻		28	2236
資料 浮橋主水一件『江川喜兵衛手記』		31	2239

第四〇号

1940（昭和15）年6月発行

湖南事変回想録	埴薫藏	1	2251
湖南事変対策	稲垣満次郎	21	2271

第四一号

1940（昭和15）年8月発行

心月公と島津久光（一）	蒲生治郷	1	2303
彪村翁茶話	蒲生春里	25	2327
健康乳幼児は何処に	鮎川静	32	2334
偶感	希声荘主人	33	2335
消息		35	2337
文藻		39	2341

第四二号

1940（昭和 15）年 10 月発行

心月公と島津久光（二完）	蒲生治郷	1	2347
旧平戸藩教育史（三）		21	2367
消息		31	2377
素行先生例祭		33	2379
文藻		34	2380

第四三号 国土浦敬一

1940（昭和 15）年 12 月発行

国土浦敬一の顕彰を提唱す	松浦珪三、蒲生治郷、 荒川雅五郎、埴薫蔵	1	2387
国土浦敬一		5	2391
浦敬一書翰		33	2419

第四四号

1941（昭和 16）年 2 月発行

平戸護国神社の敷地選定に就いて	蒲生治郷	1	2439
旧平戸藩教育史（四）		6	2444
家系を繙ねて（二完）	蒲生治郷	15	2453
新体制所感	希声荘主人	22	2460
『感の医学』の必要	鮎川静	24	2462
鸞陽興亜義塾の開設		26	2464
岡次郎氏の青島消息		29	2467
『甲子夜話』中より（一）		31	2469
文藻		34	2472

第四五号

1941（昭和 16）年 4 月発行

旧平戸藩教育史（五完）		1	2479
治療界の新体制	鮎川静	7	2485
『甲子夜話』中より（二完）		12	2490
文藻		15	2493
資料 印山記		1 ～ 21	2497 ～ 2519

三、鄭成功関係記事の解題

ここでは『平戸之光』に収録された鄭成功関係の記事について、解題を付そう。『平戸之光』における鄭成功に関係する記事といえば、それはやはり「特別号 鄭將軍忠節録」（1936年9月）である。これは『平戸之光』1冊52ページ全部が鄭成功関係の記事で埋め尽くされている。この特別号の発行の5カ月前に、「国夫人田川氏」22号（1936年4月）があった。その他、鄭成功に直接関係する記事ではないものの、平戸において鄭成功と関係ある人物に守山正彝と葉山鎧軒がいる。この二人に関する記事にも解題を付そう。

昨今の日本では鄭成功を研究する際に、洋装本の丸山正彦『台湾開創鄭成功』（1895年11月）やそれ以降のものを先行研究に位置付けている。それ以前に書かれた和本、すなわち水戸藩での川口長孺『台湾鄭氏紀事』（1828年）、平戸藩での守山正彝『平藩語録鄭氏兵話』（1831年）、朝川善庵『鄭將軍成功伝碑』（1850年）、葉山鎧軒『鄭延平王慶誕芳蹤』（1852年）は顧みられることが少ない。というのも、こうした和本はいずれも漢文で書かれており、読解するのに骨が折れるからだろう。さらに、19世紀の和本は多くが成立背景がわからなくなっており、そのため内容の正否を現在の研究者が確かめられないからだろう。しかしながら、『平戸之光』に収録された鄭成功関係の記事は、和本を大いに参考にしてなるから、和本での議論（近世における先行研究）と洋装本での議論（近代における先行研究）をつなぎうる可能性を持つ。このため、鄭成功研究にとって『平戸之光』は重要性を持つのである。

- (1) 「守山正彝氏の年譜（一）」『平戸之光』1号、愛宕山荘、1931（昭和6）年10月、pp.38-40。

守山正彝は1831年に『平藩語録鄭氏兵話』（上中下3冊）を上梓した。約28,000字の漢文で書かれた書籍である。同書は、鄭成功に関する平戸藩の公式見解となった。著者の守山正彝は、いかなる人物であったのか。本記事は守山正彝の年譜である。本記事では、守山正彝が生まれた1781（天明元）年から、29歳の1809（文化6）年までを扱う。守山正彝は幼少期より聡明で、若くして優秀な学者となる。

- (2) 「守山正彝氏の年譜（二完）」『平戸之光』2号、愛宕山荘、1931（昭和6）年11月、pp.32-34。

本記事は「守山正彝氏の年譜（一）」の続編である。本記事では、守山正彝30歳の1810（文化7）年から、38歳の1818（文化15）年までを扱う。36歳の1816（文化13）年3月19日に平戸藩の勘定奉行になった。残念ながら、50歳の1831年に『平藩語録鄭氏兵話』（上中下3冊）を上梓したかどうかについて、本記事では言及していない。著者であろう塙薫蔵は、39歳の1819（文化16）年以降について書き、『平戸之光』の次号に掲載するつもりだったのかもしれない。

- (3) 「葉山鎧軒翁と大坂騒動（一）」『平戸之光』7号、愛宕山荘、1933（昭和8）年1月、pp.7-10。

葉山高行（鎧軒、1796-1864）は1852年に『鄭延平王慶誕芳蹤』（約1,500字の漢文）を書き上げた。これを刻した石碑が1856年に完成し、平戸川内の千里ヶ浜に建つ。碑文は守山正彝『平藩語録鄭氏兵話』（1831年）に代わり、鄭成功に関する平戸藩の新しい公式見解となった。著者の葉山鎧軒は、いかなる人物であったのか。本記事が扱うのは、葉山鎧軒が1833（天保4）年に勘定奉行となり、大坂平戸藩邸詰として1836（天保7）年正月から1838（天保9）年4月まで大坂に勤務したところの話である。1837（天保8）年2月には大塩平八郎の乱が勃発する。とりわけ本記事は葉山鎧軒に即して大塩平八郎の乱を描く。

- (4) 「葉山鎧軒翁と大坂騒動（二完）」『平戸之光』9号、愛宕山荘、1933（昭和8）年5月、pp.5-9。

本記事は「葉山鎧軒翁と大坂騒動（一）」の続編である。葉山鎧軒は大塩平八郎と面識はなかったものの、大塩の考えに同情的であったという。葉山は『平戸藩士聞書』という報告書を著し、平戸藩庁に報告した。本記事では、『平戸藩士聞書』のうちの2つの論点を紹介する。本記事のほとんどは、『平戸藩士聞書』本文の転載である。

- (5) 「国夫人田川氏」『平戸之光』22号、愛宕山荘、1936（昭和11）年4月、pp.20-25。

著者であろう塙薫蔵によると、1936年1月14日の講書始において、台北帝国大学総長の幣原坦が「国書と鄭成功」という題目でご進講を行った。新聞報道によると、幣原坦はご進講の際に、鄭成功の母である田川氏についても言及したと

いう。そこで、塙薫蔵はこれを平戸の名誉であると感じ、本記事において「成功の母田川氏の功烈の一端を叙述する」。なお本記事の末尾には、楠本碩水（1832-1916、孚嘉）の漢詩「千里浜懷古 明鄭成功遺蹟」が載る。

- (6) 『平戸之光 鄭將軍忠節録』特別号、愛宕山莊、1936（昭和11）年9月、全52p。

巻頭記事の「鄭將軍忠節録—延平郡王鄭成功—」の末尾において、著者であろう塙薫蔵は、今年（1936年）の正月の講書始で、鄭成功と平戸出身の母田川氏が話題になったことに言及する。平戸人として誇るべきことであるのに、最近の若者たちは鄭成功のことを知らない。そこで、塙薫蔵は老婆心から鄭成功の事績を述べて、若者たちに知らしめるために、巻頭記事を書いたという。塙薫蔵の思ひは巻頭記事のみならず、今号全体を編む動機なのだろう。なお本号は巻頭に、鄭成功の口絵（イラスト）が載る。本号末尾の「口絵説明」によると、この鄭成功の肖像画はもともと台北の鄭氏一族に伝わるものを那須雅城が台湾総督の佐久間左馬太の命を受けて複写し、さらに大岡春濤が『通俗台湾歴史全集』の出版に際して複写したものであるという。

- (7) 「鄭將軍忠節録—延平郡王鄭成功—」『平戸之光 鄭將軍忠節録』特別号、愛宕山莊、1936（昭和11）年9月、pp.1-27。

巻頭記事として、鄭成功の事績を32の部分に分けて、時系列的に概説する。32番目では平戸での顕彰活動について説明している。また、33番目に「余説」があり、さらに鄭成功の事績を詳しく知りたい読者のために、参考文献を挙げる。すなわち、守山正彝『平藩語録鄭氏兵話』（1831年、漢文）、川口長孺『台湾鄭氏紀事』（1828年、漢文）、朝川善庵『鄭將軍成功伝碑』（1850年、漢文）、丸山正彦『台湾開創鄭成功』（1895年11月）、そして近刊の稲垣其外『鄭成功』〔通俗台湾歴史全集第2巻〕（1930年）である。

- (8) 「文藻」『平戸之光 鄭將軍忠節録』特別号、愛宕山莊、1936（昭和11）年9月、pp.28-29。

ここでは次のものを収録する。すなわち、開山神社社司・杉田恕平「鄭成功の偉勲を頌し奉りて」（和歌）。済真応「訪千里浜鄭氏遺跡二首」（漢詩）。針浦六郎「鄭成功」（漢詩）。広瀬俊一「千里浜懷古二首」（漢詩）。菅沼貞風「遊千里浜記」（漢文）。楠本碩水「鄭公石記」（漢文）。

- (9) 「県社開山神社の創設」『平戸之光 鄭將軍忠節録』特別号、愛宕山莊、1936（昭和 11）年 9 月、pp.30-35。

本記事は開山神社の創設までのいきさつを説明するものである。下関条約に基づき台湾を領有するために、日本の近衛師団が台湾へ上陸する。本記事の著者であろう埜薫蔵は、従軍記者として近衛師団とともにあった。台南へ到着すると、鄭成功廟（延平郡王祠、開山王廟、開台聖王廟）へ赴く。そして鄭成功廟を神社に奉祀し、国幣社に昇格するための運動を起こす。結果、鄭成功廟は県社の開山神社になった。

- (10) 「鄭氏の記念遺物」『平戸之光 鄭將軍忠節録』特別号、愛宕山莊、1936（昭和 11）年 9 月、pp.35-38。

本記事は平戸の残る鄭成功関係の文物（11 種）について紹介する。すなわち、[1] 千里ヶ浜の児誕石、[2] 鄭氏宅跡の竹柏樹（なぎ、力柴）、[3] 旧花房邸内の椎樹、[4] 成功真蹟榻本、[5] 銅器香炉、[6] 鄭氏古印、[7] 鄭大木薙刀、[8] 天満大自在天神の幅、[9] 幽明の扁額、[10] 鄭公石、[11] 鄭將軍銅像。

- (11) 「資料 鄭氏遺蹟碑御達に付書取草稿」『平戸之光 鄭將軍忠節録』特別号、愛宕山莊、1936（昭和 11）年 9 月、pp.39-41。

鄭氏遺蹟碑とは、石碑『鄭延平王慶誕芳蹤』のことである。編輯人の埜薫蔵によると、「鄭氏遺蹟碑御達に付書取草稿」とは平戸藩主松浦熙が 1852 年に石碑『鄭延平王慶誕芳蹤』を建てるにあたり、その主旨を一般に徹底するために、葉山鎧軒に命じて顛末の一部を記録したものである。「鄭氏遺蹟碑御達に付書取草稿」はくずし字で書かれ、現在は松浦史料博物館に保管されている。本記事はくずし字を翻字したものであるから、大変便利である。

- (12) 「資料 鄭氏遺蹟碑祭式等御達向草稿」『平戸之光 鄭將軍忠節録』特別号、愛宕山莊、1936（昭和 11）年 9 月、pp.41-43。

編輯人の埜薫蔵によると、「鄭氏遺蹟碑祭式等御達向草稿」とは平戸藩主松浦熙が鄭成功の事績を顕彰し、藩祭として祭祀の儀を定めた時、関係者に示した案文（写し）と、祭祀の諸規定である。なお、「鄭氏遺蹟碑祭式等御達向草稿」はくずし字で書かれ、現在は松浦史料博物館に保管されている。本記事はくずし字を翻字したものであるから、大変便利である。

- (13) 「資料 田川七左衛門の訴状」『平戸之光 鄭將軍忠節録』特別号、愛宕山荘、1936（昭和11）年9月、pp.43-46。

編輯人の塙薫蔵によると、「田川七左衛門の訴状」とは、鄭成功の弟の田川七左衛門が長崎奉行に助けを求めた際の文書である。田川七左衛門は特定の職に就いておらず、鄭成功の健在だったころは鄭成功から援助を受けていた。鄭成功没後は鄭成功の長子の鄭経から援助を受ける。しかし、鄭経からの援助が途絶えると、田川七左衛門は貧困に陥り、長崎奉行に助けを求めたのであった。

〔付録〕

復刻版解題

葦書房 宮徹男

『平戸之光』は、昭和六年（一九三一）十月～同十六年（一九四一）四月まで隔月発行を基本として、創刊号～四十五号の四十五冊、特別・増刊号の四冊、合計四十九冊が刊行された。発行の趣旨は、創刊号の巻頭で主宰者の塙薫蔵氏は、郷土の史実の解明・先達の顕彰・青年諸氏の啓蒙などを目的とすると謳っている。雑誌刊行は、愛宕山荘となっているが塙薫蔵氏の個人的な運営によるものである。塙薫蔵氏は、明治二年（一八六九）七月十七日に平戸に生まれ、警察官・新聞記者・教師・平戸村長などの経歴を有し、昭和二十一年（一九四六）四月二十八日に七十八歳で没している。塙氏による著作には、『浦敬一伝』（一九二四）・『作江伊之助伝』（一九三二）・『平戸史蹟大観』（一九三四）・『松浦史蹟』（一九三五）などがあり、この他に郷土雑誌等への投稿もあり遺族の許には遺稿も残されている。

創刊号～二十六号までは、「鼓吹・史乗・賢良・文藻・雑録・消息・付録」という目次で区分され二十六号以降は、この区分はなくなったが方針としては残っているものと考えられる。したがって内容を示すならば次のようになる。「鼓吹」は、王陽明・山鹿素行の思想を鼓吹するためのものであり、「史乗」は、郷土の歴史を解明せんためのものである。また「賢良」は、平戸藩に関する著名人の伝記を記したもので、「文藻」は、漢詩・和歌・短歌・俳句など読者からの寄稿を掲載したものである。「雑録」は、種々の雑録が中心であるが追悼録として伝記を記したものも見られる。「消息」については、平戸に関する会合・人物等の現況を報じている。「付録」は、平戸に関する古記録・古文書などを翻刻したものとなる。

『平戸之光』の各論考には、投稿原稿を除けば著者が明記されていないものが

その多くを占めるが、塙薫蔵氏の著述が判明するもの以外もほとんどが同氏の執筆に係るものと思われる。これらの著述は、平戸地方の郷土史として高い水準を示しており、現在の研究に比しても遜色ないものである。特に同時代の人物伝に関しては、個人的な親交を背景としたものであり貴重な記録といえる。また、文藻・消息も現在では、当時の平戸地方の文芸的な状況や郷土出身者の経歴等を知るための貴重な資料となっている。

これらの中でも特に注目すべきは、付録として翻刻されている江戸時代の古記録・古文書などである。特に「三光譜録」・「大曲覚書」・「印山記」等は、松浦氏・平戸地方を中心とする歴史を編纂したものであり、当地方の歴史を研究する上での基礎的かつ重要な史料と云える。この他、西海捕鯨に関する「西海鯨鯢記」、平戸藩の島原の乱に関する記録である「有馬軍記」、平戸藩のキリシタン嫌疑事件に関する「江川喜兵衛手記」などの翻刻も特筆される。これらの史料のほとんどは、『平戸之光』が公刊された唯一のものであり貴重な連載といえる。

このように『平戸之光』は、現在でも十分利用に耐えうるものであり、平戸地方の郷土史としては戦前・戦後を通して最高の著述と評価できる。しかし、現在では『平戸之光』は、古書市場にもほとんどその全貌を現すことなく、バラ本でさえも容易に入手しがたい現状である。ましてや完全揃本を入手することは不可能といえる。さらに、図書館でさえも完全に揃って所蔵しているところは皆無と言ってよく、平戸図書館・佐世保図書館でさえ完本不所持という稀覯本となっているのが現状である。

今、『平戸之光』を復刻することは、塙薫蔵氏の偉業を後世に残すことともなり、さらには平戸地方の郷土史のみならず学界に多大の貢献をするものと考え、ここに百八十部の限定版として復刻を行うものである。

平成八年十月

注

- 1 特に、「塙薫蔵先生古稀の寿を迎ふるに際し同志諸彦に檄して賛同を乞ふ」『平戸之光』34号（1939年6月）、pp.39-40。
- 2 宮徹男「古書の葦書房、閉店の記」、『福岡地方史研究』53号（福岡：福岡地方史研究会、2015年9月）、pp.153-163。また、『福岡地方史研究』の55号（2017年）から62号（2024年）までには、宮徹男「古文書蒐集折々譚」が連載中である。
- 3 橋口侯之介『和本入門：千年生きる書物の世界』（東京：平凡社、2011年）。

（わかまつ・だいすけ 常葉大学外国語学部准教授）